相談支援つうしん

＜第 60 号＞2020 年 4 月 13 日
県立湘南養護学校　支援連携部
相談支援係　～教師編～

　新年度がスタートしました。今年度も校内のさまざまな指導実践や特別支援教育に関する知見についてご紹介します。よろしくお願いします。

～情緒の安定を図ってユニバーサルデザインを最大限に生かす～

　進級に伴って新しい教室環境やクラスメイト、担任といった変化があります。私たち教職員でさえそれらの変化に戸惑うこともあるので、児童生徒にとってはなおさらのことでしょう。

　子どもが安心して学校生活を送る上で欠かせないことの 1 つとしてユニバーサルデザインが挙げられます。教育のユニバーサルデザインとして、神奈川県では次の３つの視点が取り上げられています。「教育のユニバーサルデザイン～小中一貫教育（小中連携）の視点から～」神奈川県立総合教育センター　2018

☆　***授業のユニバーサルデザイン化***
☆　***人的環境のユニバーサルデザイン化***
☆　***教室環境のユニバーサルデザイン化***

　こうした教育のユニバーサルデザインを最大限に生かすためには、子どもにとってなじみのある安心できる配慮がなされていることも重要です。私たち教職員も異動によって新しい環境に身を置いたとき、頼りになる顔なじみの人がいたり担当したことのある仕事を任されて手順や見通しが分かっていたりすると随分と安心します。

　それと同じように、特に年度の変わり目では子どもたちにとってなじみのある分かりやすい方法は心の支えとなり、変化に対する不安が減ってよりスムーズに新しい学習環境に慣れ、力を発揮しやすくなります。情緒の安定は学習へのパフォーマンスに大きな影響を及ぼします。学年の変わり目という避けられない変化の時期には、子どもたちのまなざしがどのように学校環境を捉えているのか想像しながら、せめて合理的な配慮によって克服できる変化については最小限にとどめてあげたいものです。

ユニバーサルデザインの効果を十分に発揮させるために、まずは子どもにとってなじみがあるデザインで情緒の安定を図り、みんなと共有しやすいユニバーサルデザインで過ごせるように働きかけるとよいでしょう。

～褒められて伸びる子に育てるために～

　話題は変わって、自閉症スペクトラム（ASD）児の中には、褒められても全く関心を示さず、お菓子といった食べ物や好みの感覚刺激にはよく反応する子どもがいます。こうした特性を持つ ASD 児の場合、好子（強化子）であるご褒美と好子ではない褒め言葉などを上手くペアリングして提示することで、笑顔や「頑張ったね、すごいよ！」といった日常的にありふれた社会的な関わりが好子となることを目指します。褒め言葉が好子となると、食べ物などと異なって好子を得る機会が増えるだけでなく、与える側にも特別な設定や準備をする負担が減るという利点があります。

　そこで、社会的な関わりが好子となるために、ご褒美と社会的な関わりの有効なペアリングの仕方について研究が複数行われています。今回はそれらの研究を調査してまとめた研究をご紹介します。

青木・野呂他（2019）. 自閉ｽﾍﾟｸﾄﾗﾑ症児における条件性強化子の成立に関する現状と課題 行動分析学研究 34, 1

Claudia L. Dozier et al (2012). A Comparison of Two Pairing Procedures to Establish Praise As A Reinforcer. *Journal of Applied Behavior Analysis* ,45, 721-735

好子と社会的な関わりの４つのペアリングの仕方

例えば、次のような特徴を持つ ASD 児がいたとします。

やってほしい行動	好子（生得性好子）	中性刺激*（社会的な関わり）
自立課題	ポッキー	えらいね！

*中性刺激とは、本人にとって行動に何の影響も与えない刺激のことです。

自立課題に取り組んだご褒美にポッキーを与えるようにすると、自立課題に取り組みやすくなるということは分かりやすいですが、目指すのは“えらいね！”といった褒め言葉を好子（報酬）として自立課題に取り組めるようになることです。好子をポッキーから褒め言葉へ移行していくペアリングの方法として、次の 4 つの条件づけの方法が紹介されています。ちなみに、条件づけと言えば、ベルの音を聞いただけでよだれを出すようになったパヴロフの犬も条件づけの１つです。

- ✓ ①随伴ペアリング

自立課題をはじめたらポッキーをあげると同時に中性刺激である“えらいね！”と褒める方法です。

- ✓ ②非随伴ペアリング

自立課題をやっているかどうかにかかわらず、決まった時間単位で自動的にポッキーと“えらいね！”といった褒め言葉を同時に提供する方法です。

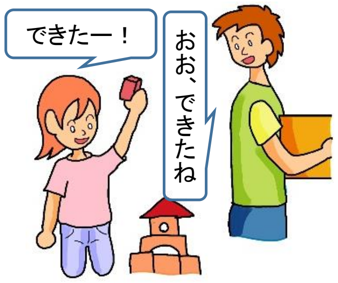
- ✓ ③弁別刺激化手続き

“えらいね！”という言葉を聞いて自立課題を始めたらポッキーを与える方法です。

- ✓ ④観察学習

他の子どもが自立課題をやって“えらいね！”と言われてポッキーをもらう姿を観察させることで、自立課題に取り組めるようにする方法です。

条件づけごとの結果

調査結果では、ASD 児の場合④観察学習＞①随伴ペアリング＞③弁別刺激化手続きの順番で条件づけが成立した割合が高かったそうです。②非随伴ペアリングを用いた研究は、元の研究をたどると有効とは言いにくい結果でした。ただし、この調査には大きな課題があって、研究によって対象となる子どもの年齢やそれぞれの好子の強さ（好みの度合い）が異なったり、中性刺激の種類が声、表情、くすぐりなど、用いられた刺激に違いがあったりするので、一概に比較ができない点が挙げられます。そこで、結論として言えることは、１ つの方法で上手くいかなかったからといって諦めるのではなく、複数の方法を試してみることが重要であると言えそうです。個人的には、観察学習が有効であることが意外でした。ASD 児は比較的他人に関心を持ちにくいので観察学習が成立しにくいのではないかと思っていたのですが、報酬が得られるまでのプロセスを視覚的に理解できるのがよい結果につながったのかもしれません。百聞は一見に如かずということでしょうか。

ペアリングをするときには、例えばお菓子とシールのペアリングから始め、シールと表彰のペアリングといった段階を踏んで移行を進めていくこともあるでしょう。より社会的なかかわりが好子となることを目指して、見通しを立てて根気強く取り組めるとよいです。